

ラスト・プロポーズ

Tamami & Tosbinari

吉桜美貴

Miki Yozbizakura



エタニティ文庫

目次

ラスト・プロポーズ

5

書き下ろし番外編
プロポーズから時が流れても

343

ラスト・プロポーズ

第一章 嫌われ者が思うには

「おい、いい加減にしろよ！ この仕事舐めてんのか？」

凄味のある低い声がフロアに響く。眼前の男に、今にも刺し殺されそうさ。

「も、申し訳ございません！」

彼のデスクの横に立つ小椋珠美は、床に頭突きする勢いで頭を下げた。

「ふざけるな！ 謝って済む問題か！」

伊達俊成は、刃物より鋭い眼差しを向けながら怒鳴った。社内ナンバーワンのイケメンと称される伊達が凄むと、かなり迫力がある。彼の怒りオーラで、その辺のオフィス家具が一センチぐらい浮きそうさ。

うわあ……めっちゃ怒ってるよ……

珠美はもう泣きたかった。

伊達は二十九歳で、珠美は二十四歳だから、五歳しか歳の差はない。なのに、超優秀な伊達を前にすると珠美は、なにもできない幼稚園児みたいになってしまう。緊張して、

委縮して、普段しないような初歩的なミスを連発してしまうのだ。

怒られて当然だ、と珠美は思う。

「送金額の桁数打ち間違えなんて、今どきバイトの学生でもやるかよ」

伊達は、吐き捨てるように言った。

「す、すみません」

頭を下げた珠美の視界に、椅子に座った彼のスーツに包まれたたくましい脚が映る。

伊達の身長は一八〇センチ以上ある。長い脚がデスクの下で窮屈そうさ。シンプルなダークグレーのスーツとピカピカに磨かれた黒の革靴は、彼の真面目な人柄を表しているようで、珠美は好きだった。

「派遣だからって、テキトーにやってんのか？」

伊達の叱責は続く。

「そんなことは……」

「これが処理されたら、どうなったかわかってんのか？ 甚大な損害になるんだぞ！」

「申し訳ございません……」

「つたく、ガキの遊びじゃねえんだよ」

これ以上謝罪の言葉が思い浮かばず、珠美はひたすら恐縮する。反省の気持ちでいっぱいなのに、うまく表現できない。

「もういい」

伊達は、珠美が持っていた伝票をひったくって自らのデスクへ放り投げ、こう続けた。「これは二階堂君にフォローしてもらおう」

「すみません……」

伊達はもう、珠美など存在しないが如く、パソコンを睨んで英文メールを読みはじめている。

こんなときなのに珠美は、彼の精悍な横顔に見惚れてしまう。高い鼻梁に、彫りの深い整った顔立ち。どこか憂いのある黒い瞳に、切れ長の目元が、強く印象に残る。キリとした薄い唇が、魅力的だ。あまりお洒落に興味がないうらしく、伸びかけの黒髪はくしゃくしゃに乱れ、浅黒い肌は野性的で、抜群に格好よかった。

どうしよう……

立ち去るタイミングを逃し、でくのぼうみたいに立ち尽くす。

「……なにボサツと突っ立ってんだよ？」

随分経ってから、伊達は険悪な顔で告げてきた。冷たすぎる視線に、ハートが叩き割られた心地がする。

「どけよ。邪魔だ」

伊達は冷酷に言い放つ。

「す、すみませんでした」

最後に深々と頭を下げ、踵を返す。フロア中から注がれる同情の眼差しが、痛い。

『またタマちゃん、伊達に怒られてるよ……』

『伊達の奴、タマちゃんにだけは容赦ないよなあ……』

そう噂する、社員たちの声が聞こえてきそうだ。『鉄鉱石の伊達俊成は派遣の小椋珠美を毛嫌いしている』というのが、月花商事の金属グループ鉄鉱石資源部の通説だった。しかし、この会社の総合職の男性社員が、一般事務の女性社員にこれほど厳しくするのは珍しい。優しくしないと、事務処理が円滑に運ばないからだ。業務をサポートしてくれる者に嫌われれば、それだけ居心地も悪くなる。だから、伊達の珠美に対する当たりのキツさは際立っていた。まるで、珠美が会社を辞めようが構わない、と言わんばかりのあからさまな態度だ。

……辛い。

涙が溢れそうになり、唇を噛んで足を速める。

興味本位の視線をかわして化粧室に駆け込み、個室に入って鍵を締めた。独りでしゃがんで、膝を抱える。

照明を反射した大理石調の床が、ゆがんでぼやけた。

悪いのは自分だと重々承知しているが、悲しみが込み上げる。おそらく同じミスを他

の社員がしても、こんなに怒られることはない。同じ事務の二階堂が先日やらかした、荷が替手形の引き受け忘れのミスも、彼は咎めなかつた。それどころかそのとき伊達が二階堂に『こんなミスぐらい、誰でもあるさ』と慰めていたのを見て、珠美はショックを受けた。

伊達は珠美のミスを決して見逃さないが、優しくフォローしてくれることなんてない。そのたびに舌鋒鋭くこき下ろされ、人格を否定され、軽蔑される。いくら鈍感な珠美でも、どうやら伊達は自分のことが特別嫌いなのだと、すぐにわかつた。嫌いというレベルではなく、憎悪すら抱かれていると感じる。

——私、そこまでのことをした？

ここまで嫌われる理由が思い浮かばない。

それとも理由なんてないの？ 私の容姿が生理的に受け付けないとか？ 性格がとにかく大嫌いか？ それならそれで、余計に凹む。

とはいえ、いつまでもこうしているわけにはいかない。涙を拭い、個室を出て、広々とした洗面台の前に立った。化粧室はひんやりしていて、人氣がない。よく磨かれた鏡に映った自分が、じっとこちらを見返している。下がり気味の眉は臆病そうで、二重まぶたの目は涙で濡れていた。

珠美はよく人から『童顔で色白だね』と言われる。自分としてはもともと大人の、スタ

イリツシユな女性になりたいのに。奮発して、有名美容室でイメチェンした今の髪型は、シルエットの丸いショートボブだ。薦められるまま、色を明るいブラウンにし、前髪をぱつと切つたが、やはり幼く見える。このイメチェンは失敗かもと、密かにがつかりしていた。それにメイクは苦手で、控え目なピンクのリップを塗るのが関の山なことも垢抜けない一因とわかっている。

派遣社員の制服を、きっちり着込んだ姿は、我ながらいかにも真面目そうだ。月花商事に派遣されて二年と少し。ようやくルーティンワークがこなせるようになり、職場には慣れ、友達もできた。今のところ、特に問題はない。

伊達の前でミスを連発してしまうことと、彼にひどく嫌われている、ということ以外には。

——私、どうしてこんなに嫌われちゃったんだろう？

洗面台のへりを掴んでうつむいた珠美は、深いため息をこぼした。



「鉄鉱石の伊達ねえ」

一條リカは、肩にかかった巻き髪を掻き上げた。それから艶やかなネイルでアイス

コーヒーのグラスにさざったストローをぐにやりと曲げると、言葉が続ける。

「あの、いっつも眉間に皺寄せてる堅物ね。どー見ても、あんたのこと嫌ってるよね。完全に嫌ってるよね」

「うう……」

珠美はカフェテリアのテーブルに突っ伏した。

ここは地上三十階にある、月花商事自慢の社員食堂。月花商事本社ビルは渋谷区神宮前まごみやまへの表参道沿いおもてみちにあり、全面ガラス張りの窓から西側を覗くと、鬱蒼とした森が見渡せる。さらに南側には閑静な大学かんせいのキャンパスと都心のビル群が広がり、ロケーションは素晴らしかった。

時刻は十四時過ぎ。昼休みはとうに終わり、人はまばらだ。

珠美は午前中、トラブルの対応に追われていたため、昼食が今の時間になった。ブラジルの鉱山で事故があったとの連絡を受けたのである。現地時間で二十時前後の出来事だ。幸い怪我けが人も出ず、採掘重機の破損もなかった。しかし、輸出港から出る鉄鉱石運搬船が一日遅れるため、通知書を直したり関係会社へ連絡したりと、そこそこのインパクトはあった。いっぽう、人事部のリカは時間の融通が利くので、いつも珠美に合わせ昼休みを取っている。

「あんた物好きだよねえ。あんなに嫌われてるのに、まだ好きなんでしょ？ 伊達の

こと」

そう言うってリカが首を傾げると、小粒なダイヤのピアスが、キラリと光る。

「と、とんでもない！ 好きだなんて！ 伊達さんはずっと憧れの人で、雲の上の人っていうか……その、好きとかじゃなくて」

珠美は慌てて言葉を並べ、ブンブンと手を振った。

リカと珠美は同じ時期に月花商事に派遣された、いわゆる同期である。入社説明会のときに、珠美はリカに声を掛けられ、帰りに二人でご飯を食べた。それ以来なんとなくが合い、今は友達として仲良くしている。

「あんたが入社してあたしと初めてランチしたとき、目え輝かせてたもんね。伊達さんカッコイイ。超カッコイイって」

リカは珠美の本当の気持ちを見透かしたように言う。

「う、ううう」

「あんな堅物のどこがいーのかしら。すっごいつまんなそう。付き合っても常に怒られてさ。キスとかしたら、けしからんとか言われそう。武士かよ」

「伊達さんは仕事に対して一生懸命なだけだよ」

「一生懸命ねえ。まー仕事はできるわな」

リカは中空を睨みながら、言葉が続ける。

「伊達って帝都大卒でまず財務部に配属、そこから生活資材部行って、ブリストルに駐在でしょ？　それで帰国して花形部門の鉄鉱石資源部だもんね。超出世コースだと思うよ。うちの会社、やっぱり鉄鉱石がダントツだもん。歴史もあるしね」

「そうだよ、スーパーエリートだよ……」

「あと顔もイケメンだしね。しかも超がつく。マツチョで背高いし、凛々しくてワイルド系っつーか。うちの社内ナンバーワンイケメンと言えば繊維、アパレル部の西大路か、鉄鉱石の伊達か、どっちかでしょうね」

「伊達さんのほうが断然カッコイイよ！」

珠美は思わずムキになって言う。

「まー属性が違うわな。伊達は硬派で西大路は軟派っつてカンジ」

リカはグロスのたつぷり塗られた唇で、ストローを啜る。それからアイスコーヒーを一口ぐくりと飲むと、こう言った。

「けどさ、あたしら派遣は総合職の男になって、とてもじゃないけど相手にされないっしょ」

やっぱりそうなのかなあと、珠美は暗くなる。

それどころか私の場合、相手にされるとかされないとか以前の問題よね？　そもそもスタートラインにも立ててないよね？

「私、どうしてこんなに嫌われちゃったんだろ？　好きになってくれなくてもいいから、

せめて嫌われてないレベルになりたい」

珠美は泣きたい気分です。

「嫌われる理由に心当たりはあるの？」

「失敗が多いからかも……」

「それくらいのこと、あんなに嫌われないでしょ。それにどっちかつつと、二階堂さんのほうが盛大なミスやらかしてるでしょ。第一キツく当たられはじめたのって、珠美が入社して割とすぐだよ」

珠美はしょんぼりしながらうなづく。

するとリカは考え込みながら言う。

「たぶん、理由なんてないんじゃない？」

「えっ？」

「これあたしの直感なんだけど、伊達ってなんかあると思う。つか、尋常じゃないじゃん。伊達の、あなたの嫌い方って。大嫌いな人でも、大人のたしなみとしてあそこまであからさまな態度、取らないと思うんだよね、フツ」

「うんうん」

「伊達ってさ、どう言えがいいのかな、なんか逆に………あつ！　見て！　噂をすれ

ばホラ……」

リカが指差す方向を見ると、ちょうど伊達と西大路が連れ立って、カフェテリアに入ってくる所だった。

「来た来た。来やがったよ。わが社のツートップイケメンが。伊達俊成と、西大路頼嗣」

リカが声を潜めて言う。

「なんかあの二人ってよく一緒にいる気がする……」

「えっ。ヤダ、珠美知らないの？ 西大路と伊達って帝都大学時代から同期なんだよ。しかも学部も一緒」

「そうなの!？」

「西大路は初等部からで、伊達は高等部からだったかなあ、確か」

「リ、リカちゃん詳しいね」

「まあね。人事ですから、一応」

長身でスタイル抜群の男二人は、ハリウッドスターの如くきらびやかなオーラを放っている。食事をしてきた社員たちも自然と手を止め、二人に目をやった。

華があるのは西大路さんのほうかも、と珠美は思う。繊維アパレル部はさまざまな衣料品を扱う、ファッション・アパレル部門の花形。彼は、そこにおいて他の追隨を許さ

ない、圧倒的営業成績を誇る若手エースだ。我が社の繊維部門が、四大商社の中でトップなのは、彼の貢献が大きいのと言われていた。この男なしに繊維業界は語れない、とも。「西大路って黙って立ってりや、死ぬほどイケメンなのにねえ」

リカは残念そうに言う。

「西大路さんって色白で肌、綺麗だよね」

珠美は感想を述べるが、西大路の傲慢そうな感じが苦手だった。あの垂れ気味の目に見つめられると、小馬鹿にされた気分になる。女性のように美しい唇にも、嘲笑されているように。

西大路はいつもモード系高級ブランドのオーダーメイドスーツをパリッと着こなし、ブラウンの髪を奇抜な七三に梳いていた。

「うっはーすごい。見てよ、あの西大路の勝ち組オーラ。後光が差してるわ」

リカは皮肉たっぷりに言う。

「う、うん」

「仕事の出来と人格って、イコールじゃないのね」

リカは頬杖をつきながらこぼした。

「そんなことないよ。比例する人もいるよ」

珠美は伊達に目を遣りながら言った。

伊達さんはやっぱり野性的って言葉が似合うなあ、と珠美はしみじみ思う。彼は一見、冷たい顔立ちで、どこか憂い（うれ）を帯びている。体格は西大路より一回り大きく、本格的にスポーツをやっていたらしく、鍛え上げられている。脚が長いうえに体幹（たかん）がパーフェクトに作られているので、どんなスーツを着ても洗練（せれん）されて見えた。

「やっぱり私は伊達さんかなあ……。あの、陰のある感じが素敵だよね」
珠美も頬杖（ほおづえ）をつき、うつとりした。

「まーねえ……。あの雰囲気はちよつと日本人離れているよね。それによく鍛えられて、相当イイ体してると思う」

リカはそう評する。

月花の若手トッププレイヤーはと問われれば、誰もが伊達俊成と答える。伊達は世界各国に眠る金属資源の採掘権（さいくわん）を獲得し、輸出入のルート（ルート）を確保し、需要元に供給する、という一連の取り引きを担っている。仕事振りは正確で緻密（ちみつ）、専門性の高い知識を有し、各国の言葉をネイティブ並みに操り、泥臭い交渉も粘り強く続けて必ず成約を勝ち取る。また、利益重視をよしとせず、クライアントの、果てはその国の利益となるようなアイデアを次々に提案しているそう、コンサルティング能力の高さも評価されていた。その誠実な人柄で、国内外より人望を集めつつあるらしい。

「月花の鉄鉱石って他社を圧倒しているもんね。全社利益の三十パーセントって言われて

んだよ、鉄鉱石の貢献額（こうけん）って。繊維（せんい）が八パーだから、やっぱすごいよね」

リカは、ストローをもてあそびながら言った。

「ああ、カッコイイなあ！ 伊達さんのあの、名実ともに若手ナンバーワンプレイヤーって感じ」

「あたし思うんだけどさー、西大路ってすごい軽いじゃん？ ふわっふわじゃん？ 女と見れば誰彼構わず口説くし」

「う、うん」

私は口説かれたことなんてないんだけどな、と思いつつ珠美はうなずく。

「そんでさ、伊達ってアタマ固いじゃん？ カッチカチじゃん？ 一ミリもジョークが通じないっつーか。女関係の噂も一切ないし」

「まあ。ふざけたことが嫌いな人なんだと思うけど……」

「それってさ……繊維（せんい）と鉄鉱石（てつこうせき）みたいだと思わない？」

リカは笑いが堪（こら）えられない様子で、こう続けた。

「ふわっふわの繊維（せんい）の西大路に、カッチカチの鉄鉱石の伊達とか。マジうけるー！」

リカの大きな笑い声が、フロア中に響く。周りの社員たちが、なにごとかと顔を上げた。伊達と西大路も、こちらを見ている。

「ちよつと、ちよつと、リカちゃん！ まずいってー！」

しかしリカは「今、初めて気づいたー！ ウケるー！」と言いながら大笑いしている。そうこうしているうちに、西大路が大股で近づいてきた。珠美は申し訳ない気持ちになりながら、西大路を見上げる。

「一条さん、楽しそうだね」

西大路は、ニコリともせず言った。

「あははっ、あはっあはっ……！ あー、お腹イタイ。西大路さん見てたら笑い止まなくなっちゃって」

リカは涙を拭いながら言う。

西大路は軽蔑したような目で、口角を上げ「で、今週末は大丈夫なの？」と尋ねた。

「もちろん」

と、リカはうなづく。

「小椋さんは？」

「あ、はい。一応、空けてあります」

と、珠美は答えた。

実は、今週の金曜日にリカと西大路が幹事の合コンが予定されている。珠美はそういうのが苦手なものの、リカになれば強引に誘われ、メンバーに入れられてしまった。いつも、リカに対しては強くNOと言えない珠美なのだった。

「小椋さんは、必ず来てよ。君だけにはどうしても来てほしいんだ。じゃないと、意味がない」

西大路の言葉に、珠美は「えっ」と目を丸くした。

——なんでそんなこと言うんだろ？ こんなことを言われるほど彼と仲よくもない……というか、西大路さんはリカちゃんとは話すけど、私には全然興味なさそうだから。

「絶対、来てくれるね？ 約束してほしいんだ。必ず来るって」

妙に真剣な顔で、西大路は念を押す。彼からは、甘ったるい香水の匂いがした。

「は、はい。そこまでおっしゃるなら、行きます。必ず」

真意はわからないまま、珠美は答えていた。

「よかった。安心した」

そう言って西大路は悠然と微笑み、伊達のいるテーブルへ戻っていった。伊達はこちらを見向きもせず、もくもくと食べている。また伊達に存在を無視された気がして、珠美は胸に痛みを覚えた。

「……ちよっと、今のなんなの？ 意味深じゃない？」

リカが顔を寄せて言う。

「あ、うん。そうだね。なんなんだろ？」

珠美は首をひねった。

「またアイツ、なにか企^{たくら}んでるのかしら？」

「さあ。リカちゃんのが仲いいでしょ、私にはわからないよお」

リカの視線の先には、向かい合って座る西大路と伊達がいる。西大路があれこれしゃべっているのに、伊達はひたすらオムライスを見つめて食べている。しばらくすると、西大路が面白いことを言ったのか、伊達が顔を上げ、おかしそうに微笑んだ。

珠美は、はっと胸をつかれた。

その笑顔がとても柔^{やわ}らかく、優しそうで。普段の不機嫌な仮面が剥^はがれ、彼の素顔が見えたように。

あんな風に笑うんだと、なぜか泣き出したくなる。きつと、私には見せてくれない笑顔なんだ、一生。

そのとき、ふと、伊達がこちらを見た。

目が合うと、視線の強さに、ドキリとする。

………あ。

伊達は怒ったような、険^げしい表情でまっすぐ睨^{にら}んでいる。間違いない。伊達はリカではなく、珠美だけを見ていた。

珠美は悲しいような、不思議な気持ちで見返す。そんな顔をされる理由が、本当にわ

からない。どうして、自分だけが嫌われているのか。どうして、そんな風に憎^{ぞう}悪^{あく}を向けられるのか。

………どうして？

珠美がしばらく見つめていると、伊達はフィツと視線を逸^そらし、立ち上がってカフェテリアを出ていく。珠美は呆^{ほう}然^{ぜん}と、広い背中を見送った。

——どうしてなの？ 私、なにかした？

壊れたプログラムみたいに、思いはループし続ける。答えの出ないまま……



そして迎えた金曜日。珠美はスマートフォンを取り出し、SNSの画面を開いた。

リカばよ…というわけで、今夜はよろしくね！

小椋珠美…了解！ 私、合コン慣れないけど、大丈夫かなあ？

リカばよ…大丈夫大丈夫。珠美は座ってニコニコして呑んでるだけでいいから♪

小椋珠美…OK！

リカばよ…場所は渋谷の『ガナパーティ・サムサラ』で二十一時スタートだからよろ

しく！

——わーん。場所全然わかんないよー！

リカから届いたSNSのメッセージを眺め、心の中で絶叫する。

全身めかし込んだ珠美は、渋谷の街を早足で歩いてきた。気合いを入れて履いてきた七センチヒールのせいで、足が痛い。

スマートフォンに表示させた地図を確認する。

もう近くにいるはずなんだけど……

地図を読むのが苦手な珠美は、完全に迷っていた。店の近くに、目印になるものはない。約束の二十一時は、もう五分ほど過ぎてている。大通りから外れたこの辺りは寂しく、雑居ビルやホテルばかりで、シンとしていた。二月のこの時期、夜はひどく冷え込む。

珠美は不意に、だらりと両腕を垂らし、がつくりうなだれた。

……私、なにやっぺんだろ？

今年でもう二十五歳になるのに。ハケンなんて不安定な身分で、毎日毎日仕事して家に帰るだけの日々。貯金もない。彼氏もない。スキルも資格もない。私と同じ年で成功してる人はいっぱいいる。結婚して子供産んでる人もいっぱいいる。なのに私は夢も希

望もやりたいこともなにもない。しかも処女だし。好きな人には嫌われてるし。状況はかなりひどい。

本当は、合コンなんて行きたくないのに……

出会いの場に行かなきゃ恋は始まらない、とリカは言う。それはそうだと思う。けど、やっぱり苦手だった。合コンで出会う男の子たちは皆ガツガツしているし、そうじゃなくてもノリがよくて軽くて……とてもじゃないけど、あの場からなにかが始まるなんて、想像がつかない。自分が不器用なんだと思うものの、うまくついていけない。

——なにかもが虚しく映る。仕事も合コンも恋愛も勉強も、やることなすことすべてが。それらは、私たちが本当に求めているけど得られない、なにかの代わりに過ぎないように思う。

けど、本物を掴むことはできない。それどころか、その正体を知ることもない。

だから、代用で済ますしかない。なにかも偽りだと薄々知りながら。そのことについて誰にも言えないまま。

体の芯まで冷え込んだ気分で、夜空を見上げた。ビルとビルの隙間に、ぼつかり白い月が浮かんでいる。

——このままで、いいんだろうか？

そんな疑問は、何気ない瞬間に去来する。駅のホームで電車を待っているときや、夜

道の街路灯に照らされた、自らの影を見たときに。私はとてつもない大事なものを見落としているんじゃないか。今すぐそれを探しに行くべきなんじゃないか。だけど、それは実体のない幽霊のように通り過ぎ、珠美もすぐに焦っていた気持ちを忘れ去ってしまう。変わりない退屈な毎日がまた始まり、あつという間に日常に埋没してゆく。

それでも、私たちはきつといつか、何者かになれるんじゃないかと希望を抱く。だから、生きていける。

それはたとえて言うなら、蝶の生態に似ている。卵から生まれた芋虫はやがて蝶になる。そういう変体が、自分の身に起こることを人は期待している。だけど人間の中には、蝶にもなれず、サナギになる方法さえわからず、芋虫のまま一生を終える者もいる。本物の蝶はいい。彼らは本能的に蝶になる方法を知っている。けど、私たち人間は知らない。誰も教えてくれない。だからずっと芋虫のままということも有り得るのだ。

私、このまま、死ぬまで、芋虫のままなのかな？

そこまで考えて、小さく首を横に振った。

やめよう。

きつと、考えてもしようがないことなんだ。こんなこと。

さあ、約束した合コンに行こう。リカちゃんにならってニコニコお酒を飲んで、晩御

飯をしつかり食べよう。もしかしたら素敵な出会いがあるかもしれないし？ それで家に帰った後はドラマの続きでも見よう。明日は早く起きて洗濯して掃除して……：：：：そうやって小さな目標を達成していけば、きつとうまくいくよね？ たぶん。

よしつと気合いを入れ直し、足を踏み出した。

そのとき。

「つーかまーえたー！」

異様に明るい声とともに、いきなりうしろから羽交い締めにされた。

うわっ……：：：：なっ、なに!?

珠美はジタバタもがいた。しかし背後から回された両腕は頑丈で、びくともしない。

「確保ーっ！ 確保ーっ！」

でかい声が路地に響き渡る。五人の男がゲラゲラ笑う。

「やだっ……：：：：ちよっと！ 離してくださいっ！」

「おーよしよし。ジタバタしないのおー」

一人の男が野卑な声でささやくと、さらに周囲の笑い声が高くなる。すると、四人の男たちがふらふら歩いてきて、珠美の眼前に立った。

……：：：：ますい。

珠美は一瞬で状況を悟り、恐怖に凍りつく。

男たちはまだ若かった。二十歳になっているかも怪しい。若者特有の鬱憤を溜め込んだ表情に、正体不明の苛立ちで目はギラギラしていた。一人は坊主頭、一人は白に近い金髪、一人は奇抜なモヒカンで、最後の少し年配の男は長髪で、鼻と唇に鋸のようなピアスをしていた。羽交い締めしている男の顔は見えないが、かなり屈強な体をしている。

「おい、車回して来いよ」

「いや、無理。ここイッツウだし」

「知るかよ。いいよ、車を突っ込め」

「やっやめてっ……!! うぐう」

「お姉さん、静かにね?」

——嘘でしょーっ!!?

口を塞がれた珠美は心の中で絶叫した。まさか街中で、こんな人さらいまがいのことが起こるとは! 油断してた。こんな夜更けにミニスカートで独りふらふら歩くなんて。平和ボケしていた自分を呪う。けど、もう遅い。

珠美は全力で抵抗した。拘束されている両腕は動かせず、懸命に脚をばたつかせた。

膝を上げ、鋭いヒールで男の足を踏み抜こうとした。しかし、別の男に横から脚を絡められ、思うように身動きが取れない。

「大人しく、しろよ」

金髪の男はふらつきながら言った。

なんだか変だ。全員、ひどく酔っぱらっているのにアルコールの臭いがしない。なんなんだろう、この異様なテンション。すごく変な酔い方だ。

……クスリでもやってるの?!

思い当たって、さらに絶望的な気分になる。そんな状態の男たちに説得なんて絶対無理だ。

「早く持ってっっちゃおうぜ」

「車、すぐそこだし」

男たちは暴れる珠美を押さえ込んで、引きずりながら移動し始めた。

珠美は懸命に頭を回転させる。どうしよう? どうする? とにかく隙を見つけて、どこにかしなきゃ! 助けを求めたいのに、辺りは腹が立つぐらい静まりかえっている。

「ガムテ、持ってきた?」

「あるある」

「第一発見者の俺が最初な」

珠美は一気に血の気が引いた。

嘘でしょ? 私、処女なの!? 初めてがこんな男たちと………

絶対嫌………!!

珠美は口を塞いでいる男の指を思いつきり噛んだ。骨まで折ってやる勢いで噛んだ。顎が砕けてもいいと思つた。

「ぐわあっ！ 痛えつつつつっ!!」

男が手を放し、一瞬、自由になる。珠美はそのまま駆け出そうとした。しかし、すぐに腕を掴まれ、引きずり倒される。尾骶骨をコンクリートに打ちつけ、パンプスが脱げた。

「テメーぶつ殺すぞつつっ!!」

男の怒号が夜気を切り裂く。

珠美はとっさに頭をかばった。

……神様っ!!

次の瞬間。

突然、目の前の男が横ざまに、三メートルほど吹っ飛んだ。

「えっ?」

珠美は目を丸くする。

男は自動販売機に腰から激突し、隣にあつたゴミ箱が勢いよく倒れた。蓋が外れ、けたたましい音を立てて、空き缶が転がる。

一瞬の出来事で、なにが起こつたのかわからず、その場にいた全員が硬直する。

恐る恐る見上げると、珠美の前に真つ黒で巨大な影が立ちはだかっている。その影は男たちより、ひと回りもふた回りも大きかった。街路灯が逆光になり、顔はよく見えない。

……ヒ、ヒーロー!?

脳裏を、特撮映画のアクションシーンがよぎる。

フリーズしていた男たちが動き出す。

「舐めてんじやねえぞ! ゴルアアアアツ!!」

激昂したモヒカンが、右ストレートを繰り出す。長身の影は、ゆらりと体を斜めにしてかわし、モヒカンの左肩を、がしっと掴んだ。その直後、一瞬、長身の男が微かに笑うのが見えた。真つ白に輝く歯がこぼれるのが。

次の瞬間、長身の男は至近距離から、強烈なボディーブローを叩き込んでいた。強力な拳がモヒカンのみぞおちに刺さり、背中まで貫通する勢いでめり込む。素人の珠美でもわかるほど、激烈な一撃だった。

——プロボクサー級かも。

モヒカンの体がくの字に曲がり、口から唾液と吐瀉物が落ちる。長身の男は拳をみぞおちに入れたまま、反対の手でなだめるように、モヒカンの背中をトントンさする。その余裕が逆に怖いと、珠美は思った。モヒカンははずるはずると、膝から崩れ落ちる。気絶

したのかも知れない。

次の瞬間、坊主と金髪が早足で長身の男との間合いを詰め、同時に襲い掛かる。素早く身を翻した長身の影を、街路灯が照らす。

このとき、珠美は初めてその正体に気づいた。

——だ、伊達さんっ!?

見間違いかと思ったが、そうじゃない。フード付きの黒いモッズコートに羽織った、伊達俊成だった。頼もしい身のこなしは、目眩がするほどカッコイイ。

伊達は殴りかかってきた金髪を、流れるような所作で避ける。すると、反対から飛んできた坊主頭のアツパーカットが、伊達の顎にクリーンヒットした。けど、珠美の目には伊達が、わざと殴られたように映った。

伊達はゆっくり首を横へひねり、ペッと唾を吐いた。街路灯が逆光となり、精悍な横顔に影が差す。

はっと、珠美は息を呑んだ。

伊達は少し首を傾げて目を細め、微かに口角を上げた。

その一瞬、今いる状況をすべて忘れた。完全に心を奪われていた。伊達の表情がひどく艶めかしく、胸に迫ってきて。映画のスクリーンに大写しになったヒーローみたいで。珠美はいまだ立ち上がることができず、その場で乾いた唇を舐める。

いきなり伊達が、目にも留まらぬ速さで、鋭い左ストレートを繰り出した。コートの裾が死神のマントみたいになり、翻る。男たちとは、明らかにスピードが段違いだ。拳がどこに当たったのか目視できないまま、坊主頭の首が不自然にねじれ、吹っ飛ぶ。

珠美は座り込んで口を開けたまま、坊主頭が道路に転がるのを見つめた。

そのまま伊達は振り向かず、電光石火の裏拳で、背後の金髪を殴りつけた。まるで頭のうしろに目がついているみたいに正確なパンチだった。パシッと乾いた音が響き、血液らしき液体が飛び散り、金髪は仰け反って尻もちをつく。気づくと、長髪の男以外の全員が、アスファルトに転がっていた。ほんの一瞬の出来事だ。

——えええ、強すぎる。

一目瞭然だった。若者たちとは体の構造が、鍛え方が全然違う。

残りは長髪の男一人。伊達が乱れたコートの襟を直しながら振り返ると、長髪男は「お、覚えてろよー」と言いながら、大通りへ向かって駆け出した。その後を、バラバラと倒れていた男たちがついていく。

伊達は小さく笑って「覚えてろよなんて、今どきB級映画でも言うかよ」とつぶやいた。

気づくと、暗い路地には伊達と珠美の二人だけだ。

伊達がこちらに向き直り、おもむろに腕を伸ばす。

……殴られるっ!

なぜか珠美はそう思い、恐怖で身を硬くした。

「大丈夫?」

柔らかく響く、低い美声。

「あ……………」

見ると、伊達は珠美を助け起こそうと、手を差し伸べている。珠美はとっさに手を取って、立ち上がった。大きくて温かい手だ。優しく、安心できる。

「あっあっあっ……………あのっ」

珠美は言葉に詰まった。よかったという安堵と、今さらながら恐ろしくなったことから、ポロポロ涙が出る。

「あっ……………ありがとうございます」

珠美はようやくそれだけ言った。

泣くつもりなんてないのに。

いつも以上に、どもっちゃって恥ずかしい。

嫌われてるのに助けてもらって、申し訳ない。

さまざまな思いが頭をよぎり、涙が激流のように押し寄せてくる。珠美は伊達の手を握りしめたまま、しゃくり上げた。こんな風に泣くべきじゃない……頭はひどく冷えて

いるのに、勝手に涙が溢れてくる。

——こんな瞬間、思う。

私の中にはこれが私だと思ってる表面上の自分と、そうじゃない奥底の自分がいるのかなって。冷えた私と、熱い私と。

いつもモノを考えて決めているのは表面の冷えた私。けど時折、こうして奥底の熱い私が存在を主張する。

伊達は、慰めるでもなく、声を掛けるでもなく、ただ黙って立っていた。手を振り払わないでいてくれて、ありがたかった。いつもなら「邪魔だ」と怒鳴ってもおかしくないのに。

心の奥底にいる彼は優しいのかな、と珠美は思う。

なにもしないで立ってるだけで「優しい」ってのも変だけど。けど、嫌ってるのに助けてくれた。きつと、放つとけなかつたんだ。

仕事でも、他の社員が困っていると、伊達がさり気なく助けていることに、珠美は気づいていた。トラブルが起きれば、彼の担当じゃなくても、必要な人員を集めたり助言をしたりする。彼は仕事を振るにしても、メール一本書くにしても、相手の負担が増えないよう、最大の注意を払っていた。いつだったか珠美が、翌朝までに必要なファイルを誤って削除してしまい、作り直しをしたときも、伊達は一緒に残業して手伝ってくれ

た。めちやくちや怒りながらだけ。

——伊達さんが、本当は優しいのは知ってたよ。

そう思うと少しうれしくなって、珠美は微笑んだ。それを見た伊達は「大丈夫？」と聞き、珠美は「大丈夫です。ありがとうございます」と答えた。

「伊達さんてなにか、やってたんですか？ その……すごく強いから」

「……ボクシング。ライセンスも持ってるけど、今はやってない」

伊達は、ぼそぼそ答えた。

「なるほど。だからすごいんですね」

プロボクサー！ そりゃ強いはずだわ。男たちとは、明らかに差があったもん。

ふと気づくと、伊達の手の甲から血が流れている。

「これ、痛そうですね。大丈夫ですか？」

珠美は落ちていた自分のハンドバッグを拾い上げ、ハンカチを取り出しながら言った。

「手加減したつもりだったんだが」

伊達は傷を見て眉をひそめ、こう続けた。

「グローブしてないし。それに本気で殴ると骨が折れる」

なるほど。あれで手加減してたんですね。

珠美は内心苦笑いしつつ、ハンカチで傷口を押さえた。

こんな強いサラリーマンがいるなんて、世の中って恐ろしい。伊達さんって何者なんだろ？ 仕事もむちゃくちゃできてイケメンで頭もよくて喧嘩も強いなんて、スーパーヒーローかなにかなの？

「もういいよ」

伊達は嫌そうに、パツと珠美の手を払った。

「あ……。すみません」

また拒絶され、胸に鈍い痛みが走る。

「……これからどうする？ 送って行くか？ 家まで」

伊達は儀礼的に言った。その声に、特別な感情は感じられない。

珠美は少しがっかりしながら「いえ、これから予定があるんで」と答える。伊達の事務的な態度に、だんだん心が冷えていった。

「帰ったほうが、いいんじゃないか？」

「大丈夫です！」

珠美は少し強めに答えた。伊達は呆気あっけに取られた顔をする。

「君がそこまで言うなら……」

伊達は目の前の雑居ビルを指差し、さらにこう言った。

「行くなら、入り口はここだけだ」

「へ？」

「ガナパティ・サムサラ」

珠美はびつくりして目を見開く。

「なんで知ってるんですか？ 私が探してるお店……」

「俺もメンバーなんだ」

「え？」

「だから……」

伊達は言いくそうに言葉を続けた。

「今夜の……その、合コンのメンバーに、俺も入ってるんだ」



どうしてこんな展開に。

伊達と連れ立って店に入った珠美は、ワイングラスに唇をつけ、ちらりと彼の様子を見ながうかがう。

伊達は不機嫌そうに生ビールを呑んでいる。

珠美はテーブルの端にいて、伊達はテーブルを挟んで対角線上の端に座っている。

ガナパティ・サムサラは不思議な空間だった。中は薄暗く、それぞれの席が完全な密室で、靴を脱いで上がって、ふわふわした絨毯じゅうたんの掘りごたつ式になっている。クツションがあちこちに置かれていて、なんだか妖あやしい雰囲気。

この店はちよつと怖いけど、伊達さんと同じテーブルでお酒呑むなんて……！

珠美は浮かれていた。席はものすごく遠いけど。

「それでは、性癖をカムアウトしながらの自己紹介タイム!! イエエア！」

西大路がハイテンションで仕切っている。女性陣がどつと笑う。

「じゃ、僕から。僕は月花商事の西大路頼嗣。アパレル部門。特技は人妻寝取り」

言いながら西大路はキメ顔を作り、こう続けた。

「SとMの両刀使いだから、Sな子もMな子もどっちも愛してる。フェイバリット体位は騎乗位」

やだー！ 人妻とかヤバイ！ エロい！ と言いながら女子が、きゃあきゃあ盛り上がる。

西大路さん、相変わらずスゴイな……

こんなに容姿端麗ようすたれいな男がおどけると、そのギャップも相まってこちらは笑ってしまう。珠美は劇場の客席にいる気分で、彼の見事な進行を見守る。西大路と伊達以外は知らない男たちだ。けど、全員只者ただものじゃないオーラを放っている。

「はい！ 次は僕」

珠美の前に座っている、眼鏡に顎ひげの男が勢いよく手を挙げた。もちろん、顔は珠美ではなく美女たちのほうを向いている。

「僕は華井物産の穴戸雄平！ 部門は天然ゴムね。ゴム。ゴムって大事だよね……」

下ネタばっかり！ やめてー！ と言いながらも、女性陣はニコニコ楽しそうだ。テーブルには五対五で男女交互に座っていて、男性陣もさることながら女性陣も華やかだ。リカの友達のエモデルと、地方局アナウンサーまでいる。皆、一様にはつとすするほどの美女で、四大卒でミスコン常連で育ちのよいお嬢様。どの女性も、容姿も境遇も珠美とは格が違う。

——こういう場に来るには、本来なら資格がいるのだ。

どことなく白けた気分で、珠美はワインを啜る。

いつもこうだ。所詮、私は人数合わせて呼ばれただけ。

珠美は短大卒で、どちらかと言えば貧乏な家庭で育った。容姿だって不細工じゃないけど美人でもない。リカはああ見えて、タレント事務所に所属していた過去があるし、実家は都内でも有数の資産家だ。商社勤務はお遊びのようなもの。

要は住む世界が違うんだよね、と珠美は思う。彼女たちと美やステータスを競おうとは思わない。けど、なにも感じないほど鈍感じゃない。華やかな世界に憧れないと

言ったら、嘘になる。これは嫉妬だってわかっているけれど。

女の子たちも含め、順番にソツなく自己紹介をこなしてゆく。伊達の番になり、珠美は少し緊張して座り直した。

伊達はおもむろに話し始める。

「あー……月花の伊達です。主に鉄鉱石の取引を。西大路とは同期で……。今夜は楽しみますんで、よろしく」

声もとびつきりカッコイイ。女性陣も一様に『きゃーカッコイイ』という眼差しに変わる。

「性癖は？ 言えよ」

西大路がニヤニヤしながら煽る。

「性癖？ あー……」

伊達は目つきをガラリと変え、その効果を試すように、セクシーに微笑む。そして、こう言った。

「巨乳愛好家。カップはEかFがベスト」

きゃーっやダー！ と女性陣の歓声が上ががる。マジですか、と珠美は驚きの目で伊達を見た。

普段の真面目な彼からは、そんなこと言うなんて想像つかない。伊達さんってちゃん

と、その場に合わせて冗談を言うんだ。

それに、Eカップですって？　こっそり自分の胸を見下ろす。その点においてなら、私も条件を満たしてるかも？

「じゃ、次。タマちゃんどうぞ」

西大路が唐突とうとつに振ってきた。しかもいきなり呼び方も変わっている。

——わ、私!?

ドキリとして辺りを見回すと、全員の視線が珠美に集まっている。伊達も含めて。

ど、どうしよう??　えーっと、なにするんだっけ?　そうだ、自己紹介……

「あっあの……えーっと、小椋珠美、です」

自分でもおかしいぐらい、キョドってしまう。それでもどうにか言葉を続けた。

「月花商事で派遣社員やっています。今は鉄鉾石資源部所属です。よろしくお願ひします……」

「性癖もお願ひします!」

正面の席の宍戸が楽しそうに声を上げる。

「せつ性癖!」

どうしよう?　処女なのに性癖もなにもないよ!　他の女の子はなんて言ってたんだっけ……

伊達の顔ばかり見ていて、なに一つ聞いていなかった。

「ダメだよ、タマちゃん。逃がさないよ。せ・い・へ・きり」

西大路が意地悪く笑う。

「性癖は、性癖は……」

変な汗で、ニットがべつとり背中に張りつく。

なんでもいい。とにかくなにか言わなきゃ。

「性癖は、処女です」

この一言で、場がブリザード級いに凍てついた。

そして、長い沈黙が下りる。

皆、シヨジヨ?　と首を傾かげ、珍種の動物でも見る顔をしている。

——あああああああもおおおおお死にたいいいい……

今すぐこの場を飛び出したい衝動にかられた。完全負け戦の合コンだわ、来るときに変な輩やからに襲われるわ、好きな人の前で処女だと露見ろけんするわで、今すぐ消えてなくなりたい。お母さん、帰りたい。

大量の矢が飛んできて、脳天にブスブス刺さった気分。落武者おちむしやの心地で、がっくりとうなだれた。

凍りついて固まっていたメンバーの中で、立ち直りをもっとも早かったのは、さすが

の西大路だ。驚愕に上げた眉をさっと戻し、いつもの笑みを浮かべ「タマちゃんはピュアで貴重なんだから、おまえら簡単に持ち帰るなよ」と男性陣に言った。

「そうよー。やめてくださいよー、珠美はプレミアアなんだから」

リカがすかさずフォローする。

その言葉を皮切りに場の盛り上がりに戻り、珠美はほっと胸を撫で下ろした。

——西大路さんとリカちゃんにフォローしてもらって、情けない……。でも、よくよく考えたら、なんで私がほっとしなきゃいけないんだろ？ 処女のなかが悪いの？ 真実より、場の盛り上がりが大事なわけ？ おかしくない？ と、心の中で吼えてみても虚しい。

ここからの商社マンたちは、スイッチが入ったようだった。

伊達も、西大路と組んで巧みな話術を繰り出し、笑いは取るわ酒はガンガン呑むわで、場は大いに盛り上がった。珠美はすっかり度肝を抜かれてしまった。

——すごい。

超絶イケメンコンビが本気を出すと、場がものすごいことになる。しかも伊達と西大路の場合、徹底的にやる。その日聞いた二人の話によると、接待では平気で全裸になったり天井から吊るされたり、とても口では言えないことをするらしい。総合商社の営業は非常識なんて言葉が霞むほど、珠美にとって信じられないことの連続だった。徹底的

にタフに、クレバーに、そして道化になれないと務まらないようだ。

一つの熟練されたシヨを見ていたみたいだった。

会話のキャッチボールのスピードが半端ない。頭の回転が尋常じゃない。振りも、返しも、素人には、とてもついていけない。出してくるネタは時事問題が絡んでいたり、流行の最先端だったり、ちよっぴりセクシーだったり、エンタメ性に満ち溢れている。彼らは生き生きと笑い、エネルギーシユにおどけ、抜群のトークで魅了した。

これが商社マンなのかあ。

珠美は終始、圧倒されっぱなしだった。

「ねえ、タマちゃん」

見ると、いつの間にか隣に座った西大路が、シャンパンをグラスに注いでいる。

「僕さ、伊達とは古い付き合いなんだよね。だから奴のこと、よく知ってるの」

「らしいですね。リカちゃんから聞きました」

答えつつも、珠美は落ち着かない。

この人、ちよつと苦手なんだよね……。さっきまでモデルの子とイチャイチャしてたのに、どうしてこっちに來たんだろ？

「実はさ……伊達にさ、ものすごい秘密があるんだけど、知りたい？」

「えっ?」

西大路は唇を寄せ、耳元でこうささやいた。

「僕にキスしてくれたら、教えてあげてもいいよ」

珠美は飛び上がった。

「なんですって?! キス?? とんでもない!

「ほら、早く。伊達に興味あるんでしょ? 唇にキスはハードル高いなら、頬でもいいよ」

西大路は至近距離で、意地悪く微笑む。

伊達さんの秘密……知りたい。知りたくないわけない。でも……

「あ、えと……え、遠慮しておきます」

西大路は驚いて、身を引いた。

「そんなに僕が嫌?」

「あ、いえ。西大路さんが嫌とかそういう問題ではなく。その、伊達さんの秘密は、きつと伊達さんが誰にも知られたくないと思うから」

「ソレ、本気で言ってるの? かわいこぶってるの?」

「そういうわけでは。私も人に知られたくない秘密とか、ありますし……」

「ふーん」

西大路はつまらなそうに頬杖をつく。珠美はそれを横目に、シャンパンを一口呑んだ。

たぶんこのシャンパンも超高級なんだよなあ、とボトルのラベルを眺めつつ思う。

虚ろな気分で、グラスを見つめた。

「いいよねえ。タマちゃんの、その表情」

隣の西大路がつぶやく。

「え?」

「僕は無性にうれしんだ。君みたいな純粋なタイプが、夜の王国に堕ちてくると」

「夜の王国?」

「そう。つまり、こういう世界のこと。夜の王国は、なにかも二元的なんだ。成功と失敗、勝ち組と負け組、美しさと醜さ、金持ちと貧乏、善人と悪人、男と女……」

西大路はシャンパングラスを片手に、芝居がかった様子で個室のフロアを見渡し、こう続ける。

「すべて二元的で、それしかない。実にシンプルだと思わない?」

珠美もつられてフロアを見回す。合コンのメンバーたちは、いつの間にか二人組のカップルになり、ひそひそと会話を交わしていた。

西大路さん、ちよっと酔ってるのかな、と珠美は思う。

「ただ、いつまでも夜の住人をやってるのは、少々疲れる。僕も、もう二十九だからね。合コンで馬鹿騒ぎなんて、そろそろ卒業だ」

「そうなんですか」

「そうなんですよ。今いるレールの上を走り続けるには、それだと都合が悪いからね。僕はレールに乗った、成功の人生を歩むんだ」

その言葉に違和感を覚え、珠美は眉根を寄せた。

西大路はそれには気づかず、饒舌に語り続ける。

「だから、そろそろ地盤を固めないとね。僕のスペックに群がる、ハイエナみたいな女は御免だ。おっとりした、ピアノの先生みたいなタイプと結婚して、子供作って、タワーマンシヨンに住まないと」

「……なんで、そんなこと、私に言うんですか？」

「なんでだろうね。君がそれをうらやましいと、思っていないからかな」

思ってますよ、と言おうとして、思っていない自分がいることに気づき、珠美は口をつぐむ。

「夜の王国の住人であるのは、今夜で終わり。僕は昼の明るい世界へ、イチ抜けするから」

西大路はにっこり笑って、ポン、と珠美の肩を叩いた。

西大路の笑顔を見つめながら、ある疑問が頭をよぎる。

この人は、そんなに簡単に抜けられるかな？ 夜の王国を。

シヤンパンの表面が照明を反射し、シルクの光沢みたいにきらめく。グラスの底から泡が一つ一つ上ってゆき、小さな魂みたいに見えた。

さつきは少し、やりすぎただろうか？

伊達俊成は、西大路と組んでひとしきり場を盛り上げた後、誰としゃべるでもなく一人酒を呷った。右手の甲の骨が浮き出た部分を擦る。そこは皮膚が少し裂け、にじんだ血が固まっている。

普段から、厄介事には極力近づかないようにしている。『嫌だなと感じることに近づかない』という実にシンプルなライフハックだ。これを守るだけで、そこそこ幸せな人生が歩める。

——だが、絡まれているのが小椋さんだとわかった瞬間、もう体が勝手に動いていた。しかも、うまく感情のセーブがきかず、ほぼ全力で殴ってしまった。正当防衛とはいえ、彼らには気の毒なことをした。

「それ、痛くないですか？」

小椋珠美が、心配そうに言う。彼女はさつき、西大路に押し出されるようにして隣に

座ったのだ。

「いや、別に」

なるべく、感情を押し殺して答える。

「でも伊達さん、すごいですね。めちゃくちゃ強いだけじゃなくて、こういう場を盛り上げるのも上手だし」

「誰でもやれるだろ」

「そんなことないです。おかげで、楽しい時間が過ごせましたし。私、実はこういう場所に来るのがすごく苦手で……」

そんなこと、知ってるよ。

伊達は心の中でそう答え、ウイスキーのロックを舐めた。

——ちなみに俺がもつとも苦手なのは小椋さんだ。仕事では、かなりキツく当たっているとと思う。というか、彼女に関しては心を鬼にして意図的に攻撃し続けてきた。仕事のためではない。百パーセント私情だと、自分でもわかっている。たぶん、泣かせたのも二回や三回じゃ済まないだろう。なのに、まったくひるむことなく、俺に対して尊敬や好意を露わにして接してくる。「あの、伊達さんで、合コンとかにもよく来るんですか？」

全然まったく。合コンなんて大嫌いだし、新卒以来、接待以外で参加したことは一切

ない。今回は特別だ。

……なんてことを、彼女に言う必要はないだろう。余計なおしゃべりは、身を滅ぼす。

「たまに」

伊達はそれだけ言った。

二人の間に、沈黙が下りる。

他のメンバーたちはそれぞれ二人組になり、お互いの情報交換に余念がない。これからデートするのか、また別の合コンを開くのか、スマートフォンを取り出してはいじくっている。ゴージャスな内装と、妖しい間接照明に照らされた男女のそんな姿は、まるで秘密結社の会合みたいだ。

そんな様子を見ていたら、伊達は周りの喧騒が遠のくような感覚に襲われた。珠美と伊達の二人を、薄い空気の膜が包み、そこだけ外界から遮断されたような。

珠美はさらさらした瞳で、じっとこちらを見上げている。彼女は色素が薄いせいか、ゴールドに近い褐色の虹彩が、美しい鉱石のように輝いていた。そこには……こちら

の思い過ごしでなければ……思慕の情のようなものが、はっきり表れている。

伊達の鼓動が、強く胸を打つ。

こういう澄んだ目をした女の子は苦手だ、と伊達はずくづく思う。同時に、心の深いところまで見透かされる気がする。心の硬い殻の部分に、音もなく